

幼児期における原体験

雨 森 良 子

（兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園）

はじめに

新教育要領における幼稚園教育の基本の第一の柱として環境による教育が挙げられている。その意義として「一般に、幼児期は、自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身につけていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して人間形成の基礎となる豊かな心情や、物事に自分からかかわろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な態度などが培われる時期であることが知られている」として、幼児自らが彼らを取り巻く環境に積極的に働きかける体験の重要性が強調されている。

またこれらの環境の中の自然については、領域「環境」の中でも、できるだけ身近な自然にふれる体験が幼児期には特に必要であるとしている。ところが幼児を取り巻く環境の中で自然物が物理的にも精神的にも減少していることは否めない。市街地に住む子どもたちにとっては物理的になくなっているが、自然に恵まれた地域でも精神的に自然離れしている。

したがって意図的に働きかけなければ自然と出会う機会を持てなくなってしまうというものを、絵本や図鑑、TVなど視聴覚による情報で知識として不確かに得ている。

このように実践のない不確かな情報による知識の上に積み上げられている教育は、いわば砂上の楼閣ともいうもので真の教育とは言えない。

そこで幼児期に五感で自然を体験する機会を多く与えてやることの必要性を強く感じるのである。

1. 原体験（proto-experience）

触覚・嗅覚・味覚及び視覚・聴覚の五感を重視した体験を、原体験（proto-experience）と定義している。このうち触覚・嗅覚・味覚は原生動物も備えている感覚でありすなわち生きていく上での基本的な感覚であるといえる。

我々成人は、情報の85%以上を視覚および聴覚によって得ているといわれている。このため、視覚・聴覚を重視しがちであるが、生存という観点からみるとこれらはいわばアクセサリ的な感覚と言えよう。

これら触覚・嗅覚・味覚とこれに視覚・聴覚を加えた五感ハ物を認識する原点であるこれらの五感を重視

した体験である原体験は自然物を素材とし触れたり行ったりすることそれ自体をその狙いとしている。このように見てくると原体験は認識の基礎にはなりうるが、教育的にはあまり意味の無いものと捉えられがちである。確かに原体験は、無方向性で点のような体験でありそれ自体評価の対象になっていない。むしろ評価の対象と考えてはいけないものとされている。

しかし、自然中での、自然との遊びといった自然とのふれ合いを通して育成される思考力・判断力・表現力などは、人間として生きていく力の基盤となりうるものである。また、原体験のひとつひとつは、教育的に評価できなくても、これらを集積して方向性をもたせれば、学習の基礎ともなるのである。従って、原体験それ自体評価の対象とならなくても重要なことであることは事実である。

現在考え実践を試みている原体験の類型と具体的事例は次の通りである。

火体験・・・熱さを感じる、いろいろな物質の焦げる臭いを嗅ぐ、煙たさ、火を起こす、火を保つ、火を消す

石体験・・・石を投げる、石を積む、きれいな石を捜す、石で書く、石器を作る、火打ち石で火を起こす

土体験・・・素足で土に触れる、土の温もりと冷たさを感じる、土を掘る、土をこねる、土器作り

水体験・・・雨にぬれる、自然水を飲む、水かけ遊び、浮かべる、海で泳ぐ、川を渡る

木体験・・・木に触れる、木の臭いを嗅ぐ、木の葉木の実を集める、棒を使いこなす、木・竹・実でおもちゃを作る

草体験・・・草むらを歩く、抜く、ちぎる、臭いを嗅ぐ、食べる、草で遊ぶ

動物体験・・・捕まえる、触る、臭いを嗅ぐ、飼う観る、声を聞く、食べる

情感体験・・・暗闇を歩く、日の出・日の入りを見る、月の満ち欠けを見る、林を歩く、大木を見る

その他・・・飢え、渇き

2. 原体験の必要性

実際に経験したことがないのに先入観により「たぶん— だろう」と事物や事象を判断している子どもたちが多い。触れてみずに「冷たいだろう」と決めつけたり、「渋い」という言葉を知っている子どもたちが渋柿を口にしたとき言葉で表現できなかつたりする。

子どもたちが豊富な原体験を身につけることは知識を学んだ時体験と知識とが結び付いた生きた知識につながっている。また「とにかくやってみよう」と理屈抜きに体験させることは子どもたちに直接的な興味・関心を持たせ、体験による感動を呼び起こす。感動は感性の育成および知的興味や関心につながっていく。

我々人間は自然なかでは動物としてのヒトでもある。このためにも大自然の中へ自らをとけ込ませたり、動植物など生きているものに触れたりする体験を十分にさせてやりたい。特に、動物とのふれ合いは生命の尊厳を知る大切な体験と言える。動物は人間の対応に対して正直に反応する。この自然の反応の体験を幼児木に充分に行わせたい。

結論は先に述べたように原体験が先行経験としてあれば後から学んだ知識が生きてくる、原体験のない知識は生きた知識とはならないということである。

3. 実践事例から

原体験のさせ方としては、自然の中での体験がもちろん望ましいわけであるが、環境さえ整えてやれば、幼稚園の中あるいは園周辺においても可能である。幼稚園における原体験の実践例を述べる。

1) 自然コーナー

前日あるいは当日の早朝に採集した植物や動物などを1日1点毎日展示している。手にとってみたり、時には食べてみたりする。子どもたちが登園する時刻には既に並べてあるので保護者も共に体験することができる。園周辺で採集した物ばかりなのに、イタドリやスイバ、ヤマツツジの花などが食べられることを知らない保護者も多かった。

脱皮したヘビの皮や実際のヘビなども展示した。保護者は嫌悪感をみせたが、子どもたちは興味を持ち、生きたヘビも手にするようになった。気の荒いシマヘビも捕獲の際に留意したためか、子どもたちに咬みつくこともなかった。展示の後自然に戻してやったが居心地がよかったのか、数日は園内に住みついていたようである。

現在ではこちらで用意するものの他に子どもたちや保護者が、自宅の周辺や登園途中で見つけた

草花や小動物を持ち寄るようになり、展示用のテーブルがいっぱいになることも多い。また園外散歩に出かけ自然の中で遊んだり採集したりしてくる機会を多く持つようにしている。ドングリがこまや笛になったりす驚きと感動は自然への親しみを増している。

2) ヒバカリを飼う

ヒバカリは小型のヘビである。自然コーナーに展示されたこのヘビを保育室で飼育している。乾いた土と湿った腐葉土の部分を作り、飼育ケースの中にいれている。子どもたちは、水を取り替えたり、抱いてやったりしている。ケースから出しても逃げ出すこともなく抱いている子どもたちの胸にすりよってなついている。ポケットに入れると首だけ出して外を見ている。他の組の子どもたちが強く掴んだり逆撫でしたりすると激しく尾を振って反応する。どのようにこのヘビとつき合っていくかを、毎日の体験から子どもたちは得ている。抱いてみて、鱗の様子や感触特有の臭いがわかり、日によって体温の違うことつまり変温する動物であることも理解した。

一般的にはおよそ飼育動物の類に入らないヘビも、愛情を持って世話をすれば、これに応えることを子どもたちは体験を通して知ったのである。

おわりに

原体験は、幼児の身近な自然環境の中で体験させられるものばかりといえる。これらの体験の中には、安全面の配慮を要する活動もある。しかしこれらを避けて通ったり、静止したりするよりも、積極的に小さな危険を経験させていくことが安全教育にもつながる。

この、人間として生きる力の基礎となる原体験を、特に幼児期に経験させたいものである。

引用文献 1) 野角計宏他編「幼稚園教育指導書」
(増補版) フレーベル館 1989
p 21~22

参考文献 山田卓三編著「原体験辞典」農文協
1990